
逃げる人

素浪人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逃げる人

【Nコード】

N1690W

【作者名】

素浪人

【あらすじ】

いつの間にか転生していた主人公。

転生した世界が、魔法が飛び交う危ない世界だった。

彼は保守的な性格をしていたため、戦いには勝てないと判断。

ならば逃げようと考え、そしてそのための準備をしていくのであった。

決める事

周りを見渡し、そして自分自身の小さくなった体を見てため息を吐く。

いつの間にか転生？してた。

正直、よくある死んだときの記憶などもないし、神様になども会った記憶は無い。

なんで記憶を持ったまま、自分ではない体の、さらに子供になっっているんだろうか？

「これはまずいよな。…………俺生きていける自信なんてないぞ。」

俺が気付いたのは赤ん坊の頃から。意識自体はあったが、赤ん坊の感覚から感じる外の世界はぼんやりとしていて、何時も眠かったせいかそんなに苦痛ではなかった。

意識もはつきりしてきたのは幼稚園の年長の頃。多分これがいわゆる自我の確立って奴かな？と思い、年長って遅くないか？とも思った。

小学生になる頃、ようやく少しの間だけ、自分の足で町を回ることが出来るようになった。

事前に知っていた情報として、住んでいる街の名前は海鳴市。うみなりしかなり大きい都市である。
さらに、市内を歩いていて見つけた翠屋みどりやなる洋菓子店。

この二つの情報から導きだされるのは、この世界は「魔法少女リリカルなのは」の世界だろうということ。

…………ふざけんなっつーの。

この世界はやばい。何がやばいって、とんでもない戦闘力を持った化け物どもがたくさん居るじゃないかよ！

俺、二次創作によくあるチート能力とか持ってないぞ。

リンカーコアとかはあるかもしれないけど、可能性としてはそれだけ。

特別な力など持っていない俺からすれば、この世界はただただ危険なだけだ。

いや、たとえ特別な力を持っていたとしても、危険であることには変わらない。

おれは一般人だ。以前は学生として、青春に生きていただけだし。格闘技なんかもやったことない。ましてや誰かと本気で争ったことなんて1度や2度くらいだ。

そんな俺が、幾らチートな戦闘力を持った所で、影で狙撃されればそれでおしまいだ。気配なんぞ分からんし、例え分かったとしても反射的に体が動くかどうか……。

そんな世界で安心してのほほんと暮らせるか！
何とかせねば。というわけで先ほどから悩んでるわけだが。

「……うーん。やっぱりあれしかないかなあ」

真っ向から戦うなんてもつてのほか、そもそも勝つ自信すらない俺
にとってそんな選択肢はありえない。

積極的に主人公たちと仲良くなり、代わりに戦ってもらう。……

なんか結構外道な案な気がする。だめだこりゃ。
ではやっぱりあれしかないな！

「よし、何があっても全力で逃げよう。」

絶対に死なないため、ダサくても逃げ延びて、生き延びてやる！

俺のこの世界での生き方が決まった。

決める事（後書き）

好きじゃない単語は使ってませんのでご了承ください。

物語までのお話

小学校に入学した。

入学したのはやはり原作の「私立聖祥大学付属小学校」だった。

何故ここに入れたかというところ、実はうちの父さんはバニングスさんの会社の子会社の社長で、ある程

度金は持っていたのだ。

両親ともに教育には力を入れてるし、俺自身頭も良かったので（これは前世の知識があるから）私立

に行かせようという事になった。

入学試験はさくつとパスし、入学式、そして初の授業となる。

自己紹介を済ませ、席に付きながら当然のように同じクラスとなった主人公たちを見る

……アリサが一番可愛いな。

い、いかん！ ノイズが走った。あぶないあぶない。
やつは主人公親友組なので係わり合いになると危険だ。
目が合うのもやばい。ここは本でも読んでおこう。

月日は経ち、いつの間にか初めのお話が始まるところになってきた。

まあ具体的な日付けは分からないけどね。

さて、日々過ぎていく時間と共に彼女たちを見ていけば気付くこともある。

そう、他の転生者の存在だ。

どうもこの時点で既にあの仲良し3人組に一人男が加わっている。
名前はレイト、レイト・T・アナスタシア。正直すげー名前だと思
った。

容姿は腰まで届く長い銀髪にオッドアイのイケメン。
性格も優しく、クラスの女の子たちの憧れの的になっている。

俺の心のヒロイン。アリサもどうやら心を奪われているようだ。

え？ 心のヒロインってどういうことだった？

……もうね、2年以上一緒にクラスでさ。この心のもやもやをどうにかするのは無理よ。

ずっと、1日に一回は視界に入るんだよ。もうマジで無理。本気で惚れました。

でもそれは隠し通す。何故なら怖いから。

ここで迂闊に近寄ると死んじゃうかもしれない。それがとてつもなく怖い。

他の転生者なんてのが出てきたさらに危険度も上がった。

そんな中で、もし転生者狩りなんてしてる奴に引っかけたらもう終わりだ。

そんな状況にならないためにも我慢しよう。うん。がんばる。

放課後、家に帰って母さんとテーブルにひじを付きながら

さらにせんべいを食べながらテレビを見ていると、例のスタート合図が聞こえた。

自分にもあったかりンカーコア。ちょっとうれしい。

えへへ。とにやにやしていると母さんに「何、にやついてるのよ。どうかしたの?」と聞かれ、

あわてて「あゝはは、なんでもないよ。」と答えた。

ほんとに?といぶかしげな表情で俺を見てくる母さんだったが、

すぐに興味を失ったのかテレビを見始めた。

まあでも動くつもりも無いので、気にせずそのままテレビを見続けることにした。

物語までのお話（後書き）

原作という単語は使ってません。
……使っていないよね？

人助けなお話（前書き）

名前出してなかったの忘れてた。

人助けなお話

物語が始まったのにも関わらず、一向に絡む気配が無い俺は、心のそこから安堵していた。

もしかしたら、このまま何も危険な目にあわずに過ごせるかも。

そんな考えは、水泳教室に行くための近道を歩いている時に木っ端微塵に粉碎された。

市が週に3回行っている子供用の水泳教室に、なぜか俺は通っているため、

俺はその日、水泳教室を行っている市民プールへ向かっていた。

建物や廃屋の間の細い道を何時も近道として利用しているため、今日も何時ものようにそこを歩いていると、何故か道端にペンダントが落ちていた。

なんととはなしに拾うと、突然後ろの方から悲鳴が聞こえてきた。

その切羽詰まった声に、「ま、まさか泥棒扱いされたとか？」などと思い、振り向くとだれもいない。

見えない位置からかと思つて、隠れて除いてみるとアリサとすずかが誘拐されそうになっていた。

……………え？

どどど、どうしよう。

慌てながらどうしようか悩んでいると、二人は近くの建物の中に入られていく。

———どうも既に誘拐されて建物の中に入れられていくところだったみたいだ。

「は、放しなさい！放しなさいってば！！」

必死な形相で抵抗するアリサと既に気絶しているすずか。
型に担がれて運ばれる二人を見ていてると、彼女と目が合ってしまった。

—— あっ！

だが次の瞬間すぐに目を逸らし、再び抵抗を始めた。
そして建物の中に連れて行かれ扉は閉まってしまった。

頭の良いあの娘は僕の存在を隠すためとつさに目を逸らしたんだろう。
う。

守られてしまった。

守りたい人に守られてしまった。

「許さない！ 絶対に助けてやる！ 絶対に！！」
逃げるだけの俺はそして決心する。彼女を守ると。

『その言葉聞き届けました。 あなたを私のマスターとして認めます。
マスターご命令を』

「……………え？」

そして守るための力を、俺は手に入れた。

『デバイス“シールドホーク” それが私の名前です。』

デバイス……………結局手に入ってしまったか。

『マスターの名前を覚えていただけませんか？』

むむ、こういうときどこういう顔をすればいいか分からん。とりあえず真顔で行こう。

「あかいゆう赤井悠だ。」

ちゃんと言えただろうか。

『ファミリーネームの方が赤井ですね。了解しました。マスター悠』

「とりあえず、いつの間にかマスターになっているのはさておき、協力して欲しいことがある。」

『それは先ほどのお嬢様方を助けることですね』

「知ってるのかよ。……そうだ。彼女たちを助けたい。そこでお前は何か出来る？」

『いちおう戦闘形態としてソードフォームがありますが、戦闘経験が無い場合は余りお役には立てないでしょう。』

ミッド式の魔法がいくつかあります。こちらは私がサポートして発動できますので、こちらで行きましょう。』

「ソードフォームってのはお前が剣型になるってことだな。確かにそれじゃ俺は無理だな。」

それで魔法、……という魔法がある？」

『はい。私は基本的にサポート系の魔法系ばかりです。』

フィジカルヒール、ラウンドシールド、ホールディングネット、エリアサーチ、フローターなどですね。』

「他のはなんとなく分かるが、フローターってのは何だ？」

『はい。フローターは対象に浮遊効果を与える補助魔法です。ホールディングネットと合わせて、今回のミッションには最適の魔法と思われます。』

「……………なるほどな。よし、コイツで行こう。気付かれない位置から行くぞ。」

『はい、マスター！』

作戦は決まった。フローターをうまく使って敵を排除しよう。

建物の窓から中を覗く。

この建物は元々工場だったようで、簡単に全体を見渡すことが出来た。

2階建てで1階にはアリサが椅子に座らされた状態で眠っている…

…いや、気絶しているのか。

顔に殴られたような青あざがある。

怒りの余り思わずこぶしを握り閉めてしまおうが、怒りに囚われないように敵を見る。

ここから見える範囲には敵は黒服が5人。

2階にはまだ居るだろうし、おそらくすずかがいるのだろう。

ありさとすずか、どちらが原因で誘拐にあったかは分からないが、

誘拐である以上どちらかの実家には話が言っているだろう。
それには関わりたくないため、助けたらさっさと逃げよう。

さて、作戦開始だ

フローター

『Floater』

敵の一人を浮遊状態にする。

「!? ……………!!」

外に居るため、何を叫んでいるか分からないが慌て始める黒服。残りの黒服は啞然として男を見ている。

俺は浮かべた敵を俺の反対側の窓の外に移動させる。

パリーン!

窓が割れ、フローターによって浮かんでいる男が建物の外に出る。
そのままさらに上方に浮かべる。

「うわあああああ!!!!」

そこでフローターを解除する。

「わあああああ……………え? なななんだこれは? 蜘蛛の巣?」

そう、事前に粘着性のあるホールディングネットを仕掛けていたのだ。

これに全ての黒服を引っ掛けて建物内を安全にしてから逃げるとい

うわけさ！

逃げ出されないようになるべくねっちょりくっ付ける形にしてやる

「と、取れない。あれむしろどんくつついてくる。」

あんまり動かないで欲しいな。口と鼻が塞がれたら死んじゃうぞ。

それからフローター無双が始まった。

ふわふわ浮いて外に捨てられる仲間を見て、黒服たちは焦り始めたようだ。

誰か居るかも知れないと漁ってみるが誰も見つからないように動いた。かくれんぼは得意だ。

一度、焦った黒服が仲間を呼びに行ったが、呼ばれて降りてきた仲間ごとフローターとホールディングネットのコンボで無力化してしまった。

拳銃を出す男も居たが、その時は拳銃に対してフローターを掛けて手から無理やり離れた。

そう、何だか慣れてきたので、フローターを二つ同時使用が出来るようになったのだ。

さらに効率化した魔法を持って、1階の黒服たちは全て外に消えていった。

それを確認した後、俺はこそそと中に入っていく。

「うわ、まだ2階に誰か居そうだな。早くしないと。」

ささつとアリサの元に行き、フィジカルヒールを掛ける。

光と共に、顔のあざが消えていき、そのきれいな顔が戻った。

「ああ、よかった。そしてかわいいぞアリサ」

気絶しているのを良いことに、本音を言ってみる。
気絶していても目の前で言うのは何だかどきどきする。

『マスターの恋人ですか？』

「うっ！、ち、違う、……………ま、まあそうならいいなと思うよ。」

『そうですか、応援していますマスター。』

「ありがとな。……………さて、次はすずかの方が、っと」

外が騒がしくなってきた。どうも助けが来たみたいだな。

「俺が出来るのはここまでのようだ。無事で良かったよ。じゃあまたね」

最後にアリサの顔を見て、誰かに見つかる前に外に逃げる。
一応誰が来たかを確認したが、どうやら月村家がメインで、カッコいい男が来てる。
多分高町兄だろう。なら安心だな。

「さて、俺は水泳教室に行かないと。……………ってもうこんな時間！遅刻だ……………」

シールドホークを拾った所に置いていた水着を入れたバッグを拾ってから俺は市民プールに向かい全力で走った。

その後先生に遅刻の事を怒られて、親にも何故か怒られるのだった。

人助けなお話（後書き）

魔法が関わらないイベントとして書いていたら、何故かこうなった。

巻き込まれるお話（前書き）

今回は今までと違って会話メイン。

とりあえず、イメージとして。

赤井：内弁慶。身内には好き放題話せるが、他人にはテンパってまともに話せない。

アリサ：強気ツンデレ。

すずか：ミステリアスな女の子。ただし普通の女の子っぽさも持つ。
なのは：まだ定義なし。

レイト：同じく。

ホーク：女性人格。辛口ながらもマスターにきちんと尽くす。

巻き込まれるお話

あの事件の後、学校へ行くと、授業中や、休み時間に背中に妙な視線を感じる。

あ、ちなみに俺、赤井^{あかい}だから席は左前になりますはい。そのうち席替えするだろうけどね。

で、どうもアリサがちらちらこっちを見てるっぽい。

………思いつくのは昨日の出来事。まさか起きてたとか？ まじかよ、俺なんかやばいこと言ってなかった？

とりあえず、今日は何も知らない振りして帰ることにする。

「ちよつといい？」

やっぱりな、無理だと思ったんだよ。

放課後になり、もう帰るところだったが、やっぱり話し掛けられた。

「あの、さ、……昨日は助けてくれてありがとう。お陰ですずかも傷一つ無く無事だったわ。」

「あ、うん。……っていうか………」

どうしよう。惚けようかどうか悩む。………でも話し方から言って断定してるよな。

というかアリサ近い近い。間近でこんな整った顔を見ると何だか照れてしまうよ。

「どうして僕だと思ったの？」

あの時は建物の中に入れられる前に一瞬見られている。もしかしたら…。

「え？ ああ、あの時ちょっとだけ意識が戻ったのよ。はっきりにしてじゃなかったけど」

確かにあ、あなたの顔が見えたわ」

「そ、そっか。」

目線を逸らしてしまう。無言で見詰め合つのはさすがに難易度が高すぎ。

「どうしたの？ アリサちゃん。赤井くんと何かあったの？」

「あつ、すずか！ んんっ！」

すずかがやってきたが、アリサが何か言おうとしたため、とっさにアリサの口を右手で塞ぎ教室の隅っこに連れて行く。このままでは僕の昨日の所業がばれてしまう

「ぶはっ！ 突然何するのよ！」

「バニングスさん、しっ！ 静かにして。」

口の前に人差し指を立てて小さい声で話すように促す。ちらつとすずかを見てみると、こっちを見て首を傾げる。

「何よ、どうしたの？」

「その前に先に聞きたいんだけど、」

バニングスさんは月村さんに昨日の事は話してないの？」

この事が聞きたかった。

もしばれていないのであれば、出来うる限り情報は広めたくない。

「昨日の事って、あなたが私を助けてくれた事？」

え、ええ、だ、誰にも話して、無いわよ！」

どうしてだろう？

まあアリサにもなにか考えがあるんだろう。

「そっか、良かった。それで頼みがあるんだ。」

その事は誰にも言わないで欲しいんだ！」

「誰にもって、……すずかにも？」

運が良かった。アリサだけが知っているようだ。これでまだ平穏な生活が出来そうだな。

「うん。僕とバニングスさんだけの秘密にして欲しいんだ。」

「秘密……、わ、分かったわよ！誰にも話さない。」

「そっか、ありがとう。バニングスさん」

「そのかわり！ あんたの秘密。教えなさい！」

「……え？」

「当然でしょ！ それ、と、私のことは「バニングスさん」じゃな

くて「アリサ」と呼びなさい！」

「…………えええ！」

「何を驚いてるのよ。私はあんたの事、「悠^{ゆう}」って呼ぶからね。」

「……………う、うん。」

「何よその返事！ もっとはつきり喋りなさい！」

「……………うん！ よろしくね、アリサ！」

「…ええ、それでいいわ、こちらこそよろしく、悠」

そう言つて花のような笑顔を向けてくれるアリサ。

予想も付かない展開。まさか彼女が俺を名前で呼んでくれるなんて
ああ、今が僕の幸せの絶頂かもしれない。

「とりあえず、すずかの所に戻るわよ。」

「うん。」

二人ですずかの元に戻る。

「あれ？ アリサちゃん。赤井くんと知り合いだったの？」

「あらずすか、…………ええそうよ。私「達」の新しい友達の「悠」よ。」

……………え？

「ふーん………よろしくね、悠くん！」

疑わしき目線をこちらに向けてから笑顔で挨拶か、
なんだろうな、この居心地の悪さは

「よ、よろしく。月村さん」

「そんな、すずかでいいわよ。アリサちゃんも名前を許してるみたいだしね」

ウインクしながら言うすずか。雰囲気的にそう呼ばなきゃいけない感じがする。

「わ、分かった。よろしく。すずかさん」

「んー。……まいつか」

何か引つかかったようだ。まあ聞いてこないって事は大したことじゃないんだろう。

それより、なし崩し的にすずかと友達になってしまった。

この流れはそのまま高町家の面々ともズルズル付き合う羽目になっ
てしまいそうだ。

何だってこんな恐ろしいシステムが組み込まれてるんだ？

「さあ、こつち来なさい。なのは達にも紹介するわ！」

「さ、こつちきて、悠くん」

「は、はい。」

右腕をアリサに、左腕をすずかにロックされ、引きずられるように残り二人の下に連れて行かれる。

ああ、もう逃げられないのか。そしてちょっとだけうれしい。

「どうしたの？　アリサちゃん、すずかちゃん。」

「んん？　どうしたんだ？」

真剣な顔で話をしていたのはとレイトがこっちを向く。
なのは多少表情が緩んでいるが、レイトは真剣な顔をしている。
何考えてるんだろ。

「私達の新しい友達よ。ほら、あんた。挨拶しなさい！」

「う、あ、ええっと、赤井悠です。よろしくね。高町さん、ち、アナスタシアさん」

危ない、チョコと呼ぶとこだった。普段心の中でチョコレイトって呼んでるからなあ。

「……………まあいいわ、前々から私達のグループって男一人の女三人でバランス悪かったでしょ。」

これに悠が入れば男が二人になってバランス取れるわ。どうかしら？」

「……………まあ、俺は異論は無いな。なのはは？」

「うん。私も良いと思うよ！　それに私、前々から赤井くんと仲良

くしたかったし！」

「そうなの？」

「うん。赤井くん時々私たちのほうを見てたし、仲間に入りたいのかな？　って思ったんだけど……
なんだかタイミングが掴めなくて話し掛けられなかったんだ」

うん。見ていたのはアリサだ。断じてなのではない。

「そうだったんだ、なのはちゃんが躊躇するなんて何だか珍しいね。」

「私ってどう見られてるんだろ……。」「

女子軍団はなんだかぼやぼやした話をしているが俺は正直それどころじゃない。

レイトがこつちを真顔でじっと見つめてくるんだ。背中からあれがだらだら流れるのを感じる。

こいつなんでこつち見てんだ。一言も喋らないし、気持ち悪いなあ。

「それじゃあ帰りましょうか。悠も準備しなさい！」

「あ、うん。ちょっと待ってて」

帰る支度を済ませ、俺は4人の後を追った。

5人で談笑しながら帰る途中、突然なのはが急いで帰ると言い出す。

「ご、ごめんみんな。私、用事あったの忘れてたの。急いで帰らなきゃ。」

バイバイ、アリサちゃん、すずかちゃん、悠くん」

「ちょ、ちよつとなのは！」

なのははそのまま家まで走り去ってしまった。
といっても足遅いからまだ見えてるけど。

「おれも用事あったの忘れてたわ。先に帰る。またな！」

そういつてレイトはなのはを追って走っていった

「「「……………」」」

二人の姿が見えなくなってから3人で顔を見合う。

「どう思う？」

「どうって、用事あったんじゃないの？」

疑問に思ったアリサが、僕達二人に聞いてくるが、すずかは別段不思議には思わなかったようだ。

「あのね、なのはは『バイバイ、アリサちゃん、すずかちゃん、悠くん』って言ったのよ。」

これって初めからレイトが入ってないのよ。まるで後から来ることを知ってるみたいに」

「……………」

すごく鋭いな。さすがはアリサだ。

「二人は何か隠してるのよ。言えない事情でもあるんでしょうけど、……なんだか腹が立つわ！」

「どうどう、抑えてアリサちゃん。」

「私は動物じゃないわよ！」

おそらく二人はジュエルシード探しに出かけたんだろっな。確かなのはが一時期不登校になるはずだから、まだ序盤なのかな？

「それにアリサちゃんと悠くんだって、隠し事してるじゃない」

「う、……そ、それはその……………」

物思いに耽っているといつの間にか立場が逆転してた。

「ゴメンねずかさん。僕がお願いして秘密にしてもらったんだ。だからアリサをあまり攻めないで。ね。」

「……ふふっ、分かったわ。私も余りアリサちゃんを困らせたくないもんね。」

こっちを見て「ふふっ」って笑いやがった。

なんだろうこの見透かされてる感。この娘、まじ怖すぎ。

「も、もう！ ほら帰るわよ！」

顔を真っ赤にしながら言い放つアリサ。

これ以上苛められないように話を変えないと。

「ふ、普段みんな、放課後どうしてるの？」

「そうねえ。私達は基本的に4人のうちの誰かの家にお邪魔してるか翠屋でお茶してるくらい……かな。」

「そうだ！ 今度、あんたの家に皆で行くから覚悟してなさいよ！」

「ええー！ 来るの？」

「何よ、その言い草……あ、あんたまさか、何かすごい隠してるんでしょ！」

「う、ううう、そんなことないよ。」

「もうアリサちゃんってば」

にやりといやな笑みを浮かべながら、追求してくるアリサに苦笑しながら突っ込むすずか。

別に家に来るのは良いんだけど。

……なんていうか既にグループの一員として完全に加わってるよね。まじでどうしよう。

逃げるとか無理じゃね？

「悠くんって、初めの頃は結構強気な人かなって思ってたんだけど、
なんだか弱弱しいね。」

そんなことを言いながら小声で「小動物みたい」と言ってるのが聞
こえてるんだよすずか！
そういうのは聞こえない所で言ってくれ。

「そうね。あれじゃない？ 内弁慶ってやつ！
あれ？ でも私に対しては結構がん来てたような……………」

「へえ〜。そうなんだ〜。」

だらだら汗が流れる。なんだかばれてるとかどうでもいいから逃げ
出したい。

あのわざと語尾を延ばす言い方、目が笑ってるし、口元も隠せてな
い。正直きついよすずかさん。

「そ、そろそろ、俺は帰るよ。また明日ー。バイバイ」

「え？ ああ、また明日！」

「バイバイ」

逃げちゃった。まあ仕方ない。逃げるのは僕の本分だしね。

帰ってから夕食、入浴、家族の団欒を全て済ませ。2階の僕の部屋で今日の反省をする。

『マスター。感想を言つと今日のマスターは非情に“へたれ”でしたね。』

「うるさい！ 小学生なんてこんなもんだろ。だいたいあの娘たちがおかしいんだよ。」

『確かに、彼女たちは年齢にそぐわないほど成熟していましたからね。』

「そうだよまったく、はあ……、対人の会話は両親ぐらいしかして来なかったから、余計テンパってしまった」

『テンパ？ まあ何時ものマスターではないように感じられましたね』

「うまく話せない上に、あのすずかの相手は無理だ。絶対アリサが好きなことばれてる」

『？？ 別に良いのではないですか？ あの吸血鬼の娘にばれた所でさして問題は無いと思われませんが……』

「あのな、人つてのは誰にばれても恥ずかしいものなんだよ。」

『そうですか、申し訳ありません。……でも既にばれてしまっています。』

「ここは一つ、彼女を味方につけてはいかがでしょうか？」

「くそ、人事だと思って。まあでもそれもいいかな。何を要求されるか分からないけど」

『仮にも友達なんですから、喜んで協力してくれますよ』

「そうかな。……………そうだな。決心が付いたら相談することにする！」

『マスター……………』

「べ、別にいいだろ。」

『私からはこれ以上とやかく言いません』

「この話はとりあえずお終いだ。それよりもまず、俺の平和が乱されているこの現状の方が問題だ。」

『例の魔導師グループに入れられてしまいましたね。』

「ああ、大問題だ。別に友達になるくらいは……………怖いけどまあ大丈夫だが、あのチヨコ野郎のそばにいたくちやいけないのが嫌だ。」

『ずいぶんと敵意を込めた視線をマスターに送ってましたね』

「え？ あれ敵意込めてたの？」

『……………マスターって鈍いんですね』

「そんなの一般人に分かるか！」

『マスターは魔導師じゃないですか』

「ただお前を拾っただけだ。そして偶然使えるだけのそこら辺にいるただの小学生だ」

『ただの小学生が、誘拐犯を相手にするなんて事なんて出来ませんけどね』

「ぬぬぬ」

痛いところ突いてくる奴だ。

『それで、今後どうするおつもりですか？』

「とりあえずは現状維持で、どうせしばらくしたらあいっすら不登校になるだろ。」

そしたら平和だ………すずかがいるけど」

『はあ、問題の先送りですね。きちんと今後の事を考えておかないと、後で痛い目を見ますよ』

「分かってるって。一応だが、あの魔導師たちの戦いを覗きたいと思う。」

それでそれに対抗する戦い方を身に付けておこう。」

『ふむ、強くなるプランとしてはまあ、………いいでしょう。』

マスターの願いは平凡な生活と平和。

これを実現するために、非常識な力を求める。実に面白いですね。』

「面白がるな。非常識な力と言っても基本は守りだけだ。お前のソードフォームとやらもどうせ使わないだろうしな」

『メモリ確保の為にソードフォーム自体が破棄されそうですね。折角の私専用のフォームなのですが』

「まあ、俺をマスターに選んだのが運のつきだってことだな。諦めてくれ。」

『何を今更。あの日、あなたを選んだ時から最後までマスターと共にあることを誓っています。』

何であるうともマスターのお役に立つのであれば、受けるのが私の務めです。』

「う、そ、そうか。ありがとな。ホーク」

『（照れてますね）ありがたきお言葉』

「さ、さてそろそろ寝ようか。おやすみ。」

『お休みなさいませ。マスター』

夜は更け、今だ戦い続ける二人の魔導師を尻目に、俺はその意識を手放した。

巻き込まれるお話（後書き）

多少修正を加えました。

ばれそつになる話。(前書き)

なのはとすずかの口調の区別を付けたい。
どうしたら！

ばれそうになる話。

高町グループ仲良くなった翌日、休み時間にレイトに屋上に呼び出された。

「おい、一応聞いておく。お前、……………転生者か!？」

さて運命の分かれ道……………かな。ここで領けば。

攻撃されるかもしれないし、味方として取り込まれるかもしれない。まあ現状、味方として見られることは無いか。

とすると、答えは決まっている。

「転生者……………ですか？ 輪廻転生をする人の事ですか？」

多少首を傾げながら惚けてみた。

「……………いや、なんでもない。（小声で）そうか、俺が介入したからか？」

何とか通用したようだ。自分から高圧的に聞いて来ておいて、なんでもないはねえよ。

「まあ、……………とりあえず、……………男がこれで二人になったんだ。頑張っていこうぜ!」

こいつの中で俺は転生者確定だったのか、もし違った場合の事を考えていなかったようだ。

「はあ、…わかりました。」

「ってことで、じゃあな！」

言うだけ言って、さっさと教室に戻って行った。

「……………何だったんだ。」

「ほんとよね。呼び出しておいて勝手に帰るなんてありえないわ！」

——え？

声した方、ドアの後ろのほうを見るとアリサとすずかが立っていた。
ついでになのはもいた。

「え？　なんでいるの？」

「なんでいるのじゃないわよ！」

一つ前の休み時間にあんたたちが男だけで密談するって言うからわざわざ隠れて覗いてみたら何よこれ。

「いたい何がしたいのよ！」

「俺に言われても……………、というか覗いてたんだね。」

「アリサちゃん落ち着いて。勝手に覗いてた私達はあるより強く言えないよ。」

むう。俺がグループに入ってから、なんだかレイト株が暴落してっ

てないか？

なんだか悪いなあ。

『マスターは気にしなくても良いと思いますが。』

『そうかな？』

「レイトくん、どうしてあんなこと聞いたんだろ。転生者って言うてたよね」

なのはは重要な単語をきっちり聞いていたようだ。
言い方からしてもう知っているのか？

「知ってるの？ なのは」

「うん…レイトくんと話しているとたまに自分は転生者だって言うの。」

あいつ、自分で言いふらしてたのか。ばかじゃないのか？

「転生って、死んだ後に生まれ変わることだよな。」

「そうね。それで転生者を自称しているってことは……前世の事を覚えてるってことかしら？」

「あはは、まさかそんなわけ無いよ。」

この天才組め！ 推論でほぼ正解を導くとは。……まあ転生者なんて単語からなら予測出来るか。

「とにかく、あたしからあいつに言っておくわ！
自分から呼んでおいて置き去りにするなんて最低だって」

「まあそうよね。ちょっとこれは酷いと思うし……」

「さすがなのはもこれは酷いと思います。」

「あ、ありがとう。」

アリサに守られてるなあ。ああ、自分が情けない。

『マスター…………。』

『言いたい事ははっきり言ってくれ…………。』

ホークにも呆れられる。そりゃそうだな。

鐘が鳴り、教室に戻る途中に思い出し、アリサに話し掛ける。

「あ、そうだ。ねえアリサ。」

「ん？ なに？」

そのまま回りに聞こえないようにアリサに耳打ちをする。

「昨日行ってた俺の秘密の事。今日の放課後でいいかな？」

「いいわよ。じゃあ帰りに悠の家に寄るわ。それでいい？」

「うん。分かった。」

アリスは頷くとこちらに向けてにっこり笑ってから教室に入っていた。

こちらを見ていたすずかは同じくにっこり……いや、にやりと笑って教室に入っていた。

……

うわあああああ。

ばれそうになる話。(後書き)

今日は短め。

アリサが来るお話 前半（前書き）

感想来ると書く気になります。
ありがとうございます。

アリサが来るお話 前半

翌日の朝……

「母さん、今日友達が遊びに来るから」

「何ですって！ まあまあまあ、ようやく悠にもお友達出来たのね。

お母さんうれしいわ。

お母さんに任せて！ 準備しておくから！！」

そう言い放ち、母さんは台所に消えていった。

「やばい、テンションMAXだ」

『どうなることでしょうね』

授業も全て終わって放課後になり、5人で帰宅する。

結局あれからレイトくんはなのはを中心にごっつり絞られていた。

「ごめんな赤井くん。今度からああいうことはしないよ。これから
もよろしく」

「僕は気にしてないから大丈夫だよ。よろしくね。」

二人で握手をして仲直りを宣言する。と言っても別に喧嘩はしてい
ないのだが……。

そういえば彼は結構大人ぶっていたので、まるっきり子供な俺とま
ともに付き合えるのだろうか。
バカらしいのでぞんざいに扱ってきそうだな。……気にしなくても
いいか。

「うん。これでよしと!」

「さすがはアリサちゃんね。」

あはは、人間関係つてのはそこまで簡単じゃないだろうに。
さすがに天才組でもそこら辺の感性はまだまだ子供かな。

とりあえずこういう形で騒動は終結した。問題は特に無いでしょう。

そして現在、帰宅中。

最近恒例になった、二人の逃避行も終え、3人で帰る。

「最近あの二人が忙しいせいで、全然遊べないわね。」

「え？ そうなの？ アリサとすずかさんは帰ってから一緒に遊んでると思ってたんだけど」

この二人は異様に仲良いからな。帰宅後に連絡取り合って会ってるんじゃないかと思ってたんだけど。

「それは無いよ。もしなのはちゃんたちを除いて遊ぶんだったら悠くんも呼ぶし。」

「そうよ、あんたを置いて私たちだけで遊ぶわけ無いでしょ！」

「そっか」

きちんと俺を友達と認識して仲間外れにしないでくれる。やさしいな二人とも。

「二人とも、ありがとう」

思わずお礼を言ってしまう。

「どういたしまして」

「あ、当たり前よ！」

すずかはこっちをみてにつこり笑い、アリサも戸惑いながらも笑顔を向けてくれる。

………珍しく、いやらしくない笑みだった。

「じゃあまたね。バイバイ」

「祐くんまたね」

「また後でね、悠！」

分かれ道に差し掛かったので、二人とは違う方向に帰る。

部屋の掃除をしないといけないので、急いで家に帰る。

「ただいまー！」

「おかえりなさい。」

奥の方から母さんの返事が帰ってきた。居間にでもいるんだろうか。それはともかく2階の自分の部屋に急ぐ。

「あれ？ 部屋がきれいだ。母さんが掃除したのかな？」

『そうかもしれませんね。』

「ちょっと聞いてみるか」

1階に降り、居間に入ると母さんが何時も通り煎餅を加えながらテレビを見ていた。

「お帰りなさい悠。ちゃんと手は洗ったの？」

「あ、まだだ。」

洗面所に行って石鹸を付けてごしごし手を洗ってからティク2だ。

「ねえ母さん。俺の部屋今日掃除した？」

「ええ、したわよ。悠の友達が来るって言っし。粗相の無いように念入りにしておいたから大丈夫よ。」

「そっか、ありがと母さん」

「ふふ、どういたしまして。」

何時も通りの緩い会話。気が向いたときに喋るくらいだが、この雰囲気は俺は大好きだ。

「そっいえば、お友達は今日何時頃来るの？」

「もうすぐ来ると思っけど」

その時ピンポンとチャイムが鳴り、来客を告げる。おそらくアリサだろう。

「多分、アリサだ」

「あら？　もしかして女の子かしら？」

呼んでいるのに無視するのは良くないのですぐさま出迎える。

「いらつしゃい。中入っていいよ。」

「こんにちわ！ なかなか良い家ね悠」

「あらあら、こんにちわ。もう！ 悠ったらこんな可愛い子を家に呼ぶなんて。知ってたらもっと違うもの用意したのに。さあさあ中に入って。悠の部屋で待っててね。すぐにお菓子持っていくから。」

「お、お気遣い無く。」

「まあまあ、可愛い声ね。はあ、お母さんこんな娘が欲しかったのよ。今からでも悠斗さんと相談しようかしら。それはともかくどうぞ。ほら悠、早くアリサちゃんを案内なさい！」

アリサもこの母さんのテンションに驚いてるようだ。

そりゃそうだ。俺も驚いてるし。ここまでは अच्छا けるとは。

「もう母さん落ち着いて。俺たち部屋に行くから勝手に入ってこないでよ！」

うわわ、思春期の中学生が異性の友達を連れてきたときの反応か！

「行こうアリサ、部屋はこっちだよ。」

「う、うん。お邪魔します。」

「お邪魔します。」

…………… うん？ あれ？ 一人多くない？

「あらあら、気づかなかったけど黒髪のこれまた可愛い子が居るじゃない。」

この子もお友達なの？ 悠

「え？ ああ、うん。すずさんっていうんだ。」

……すずさんとりあえず上がってよ。」

「うん。」

満面の笑みである。まさか今日は初めからこのつもりで！

何はともあれ、二人を連れて部屋に入る。

二人は興味深そうに部屋の中をあれこれ探索する。

「男の子の部屋って初めて入ったわ。……漫画とゲームしかないわね。」

「初めてって、…レイトくんの家にも行っただんでしょ？」

「レイトくんの家にはまだ行ったこと無いよ。なんだかいつも理由つけて断られてるの」

どういうことだろ。まさか一人暮らしだったりして。

……ありそうだ。

「なのはちゃんが行った事あるみたいだったけど。」

「あの二人は本当に仲良いね。」

出来てるんじゃないかとも思ったけど、二人の前では言わなかった。

「あらあら、3人で何を話しているのかしら？」

ドアを開けて母さんが満面の笑顔で入ってきた。

手にはポテチが入ったかごとジュースのコップがある。

「さあどうぞ、ゆっくりして行ってね。」

意外とさくつと部屋から出て行った。

「ゆ、愉快なお母様ね。」

「優しそうなお母さんで羨ましいな。」

「そ、そうかな。」

まあうれしいっちゃうれしい。自慢の母さんだからね。

「ところで、すずかさんはどうして……………」

来たのか、と直接言うのは何だか躊躇われる。友人に隠し事はどうにも後ろめたいし。

「あら、今日の帰りに言ってたでしょ？」

「帰り？」

「なのはちゃんたちを除いて遊ぶんだったら3人でって」

「うつ！」

実際とは若干違うが、確実にそういう意味だった。これはすずかも隠せないか。

「どうする？ 先に用事済ませてから遊ぶ？」

「そうね。私は遊ぶことよりそっちの方が興味あるわ」

「?? ねえ何の話かな？」

悠の秘密の話よ。とアリサがすずかに教える。結局すずかにも言わないといけないか。

後半へ続く!!!

アリサが来るお話 前半（後書き）

すずかの秘密明かししようかと思ったけど止めた。

アリサが来るお話 後半（前書き）

感想ありがとうございます。
やる気が出ます。

アリサが来るお話 後半

人に聞かれてまずいってワケではないのだが、一応秘密なため、ドアの向こうに母さんが居ないか確認する。

「ずいぶん徹底してるわね。そこまでの秘密なのかしら」

そういうことだ。

先ほど、アリサに俺が秘密を打ち明けると言う話をした後、さすがは何故か真剣な顔をしている。
何故だろう？

「さてつと」

木製の丸いテーブルを囲んで3人。顔を幾分か寄せて小声で話し始める。

「……………」

あれ？ 何言えばいいんだ？

ええつと確か、俺の秘密を言えばいいんだよな。

転生者に関しては屋上で否定しているし、さすがに言いにくい。
他に秘密って言うところ……魔法くらいだよな。よし！

「ええつと、俺は実は……………」

「「実は？」」

「……………魔法使いなんだ！」

「……………」

「何それ」

……………言い方がまずかったかな。全然信用してないよ。

「冗談は良いからさっさとほんとの秘密を言いなさいよ!」

「いや本当なんだよ。ホーク!」

「はいマスター。お呼びですか?」

「誰!?」

突然声がしたらそりゃあ驚くよな。

二人はキョロキョロあたりを見回している。

「これだよ。これがホーク。俺の相棒だよ」

ペンダントを外してテーブルの上に置く。すると淡い光を出しながらホークは話し始めた。

「こんにちはお嬢さんたち。私はデバイス“シールドホーク”。マスターとは既に契約を結んでいる間柄になります。」

「……………けいやく」

「……………ペペペンダントが喋った!」

「ちょっと、アリサ、もうちょっとボリューム下げて」

「あ、うん。ごめん」

うん素直だ。

「それにしてもペンダントが喋るなんて……………人工知能かしら？」

「お姉ちゃんに見せたら危ないかも。」

「どんなおねえさんだろ。」

とりあえず僕はこのホークのお陰で魔法が使えるようになったんだ。

「

「なんで喋るペンダントのお陰で魔法が使えるようになるのよ！」

「ご尤もな話だ。それでは実演してみよう。」

「得意魔法のフローターだ！」

『Floater』

ホークが詠唱の補助をしてくれたフローターを使用し、アリサを浮かべてみた。

ふわふわとゆっくりアリサが浮いていく。

「わわわわわ、う、浮いてるわ。あわわわ、降ろして降ろして！」

「あ、うん！」

宙に浮いていたアリサをゆっくり怪我をしないように降ろす。

「はぁ、はぁ。急にびっくりしたわ!」

突然宙に浮いたらさすがに焦るか。しかも自分で操作してるわけじゃないし。

「ねえ悠くん。次は私を浮かせてみて!」

「あ、うんいいよ。」

どうやらさすがに興味を持ったみたいだ。
さっそくフローターを使って宙に浮かせる。

「すごいわ、私、空中に浮いてるわ。……でも自分で移動できないのね」

「まあ僕が操作してるからね。」

「残念ね」

満足したみたいなので、すずかも同様に怪我しないように降ろす。

「不思議な体験をしたわ。
それにしても魔法なんて非科学的な物がこの世にあるなんて思わなかったわ。」

「うん。私も驚いたわ。こんな夢みたいなのがあるなんて」

二人とも目がキラキラしている。確か、二人ともええっと、リンカ

「コアだっけ。」

あれが無いんだよな。

「ねえ悠、私たちもこの魔法って使えるのかしら。」

「ええっと、魔法は魔力がないと使えないんだ」

『そこからは、私が説明しましょう。』

皆で一斉にテーブルに置かれていたホークを見る。

『魔法は、先ほどマスターが言ったように魔力がないと扱えません。』

「そりゃあそうよね、ゲームとかでも結局MPを消費して魔法を使ってるし。」

『はいそうですね。そしてその魔力ですが、これは基本的に生物の体から生み出される物になっています。』

「これも全部ゲームと同じだね」

『はい。ですがこの魔力は実は特別な素質を持った人にしか存在しません。』

この素質と言うのが、リンカーコアと呼ばれる体内に存在する機関にです。』

「へえー、そんながあるんだ。でもそれって人の体の中にあるんだよね。」

それって身体検査とかで調べたらすぐ分かるんですか？」

『リンカーコアは基本的に視認出来ませんし。さらにリンカーコアを持った人が死ねば消えます
なので地球上では現在の所、存在は確認されていないでしょうね。』
ほえ〜と感心している美少女二人。二人ともリンカーコアが無いと知ったら悲しむだろうか。

………

「……それで、私たちにはそのリンカーコアはあるのかしら」

『申し訳ありませんが、二人ともリンカーコアはありません。』

「そっか」

「まあそうよね。」

そんなでも無かった。まあ二人とも強いからなあ。

「これが俺の秘密だよ。これでいいかな？」

「びつくりしたけど理解したわ。確かに隠したくなるわね、これは」

「悠くんって意外とすごいかったんだね」

「以外は余計……、とりあえず、このことは誰にも言わないでね。」

なんだかすずかに遠慮が出来なくなってきた。
すずかが悪いから仕方ない！

「なのはちゃんとレイトくんにも？」

「うん。本来アリサだけに言うつもりだったし。」

「すずかはあくまでイレギュラーだ。」

「分かった。誰にも言わないよ」

「ほんつとくに誰にも言わないでね。俺はこの力を死ぬまで隠していくつもりだから。」

そう。この日常生活において特に使わないこの力は隠して生きていくんだ。

「この魔法の力はさ、さつきみたいに浮くだけじゃなく、人を傷つけることだって出来るんだ。

危ない力なんだ魔法は。だから僕は使う機会を出来る限り減らしたい。臆病かもしれないけどね。

もし僕のこの力がばれれば否応無しに使わざるを得ない状況に持っていかれると思う。

だからお願い。絶対に誰にも、家族にも親友にも大事な人にも、言わないって約束して。」

この力がばれるのは困る。魔導師ってのは野蛮な奴が多いし非殺傷だとしても死ぬかもしれない。

というか非殺傷って殺さずに翫ってるって奴でしょ？ そんな事してる奴らなんていけ好かない。

死ぬのは怖いし殺すのも怖い。傷つけるのすら怖い。ならどうする？ 答えはもちろん逃走だ。

「わ、分かったわ。誰にも言わない。なのはたちにも家族にも。」

「私も。絶対にお姉ちゃんたちにもなのはちゃんたちにも言わないわ。」

「うん。ありがとう。」

これだけ釘をさしておけば大丈夫だろう。
これではれたら仕方ない。その時は…………。

「さて、ちょっとトイレ言ってくるね。二人はゲームでもしててよ。」

「分かったわ。」

さて、シリアスな話も終わったし、もう気を抜いても大丈夫かな。

『マスター。』

「ん？ ホーク、どうしたの？」

『アリサさんなんですが、……………』

「アリサがどうかしたの？」

『さっきは言いませんでした、リンカーコアを持っています。』

「ええ！ 本当に？」

『ええ間違いありません。魔導師ランクも高く、高町なのはに並ぶほどの魔力を感じました』

「まじかよ……。」

さて面倒なことになってきた。

きっとジユエルシード編は問題なく済むが、次の闇の書では間違いなく狙われる。

「うーん……、ねえホーク。アリサのリンカーコアを封印することって出来る？」

『出来ます。』

「出来るのか、封印すれば外から魔力の感知とか出来なくなるの？」

『はい。よほどの魔導師でもなければリンカーコアの存在自体感知できないでしょう。』

「はあ、良かった。ほんとに良かった。じゃあさっさと戻って封印してしまおう。」

『そうですね』

トイレを済ませ（トイレは1階にある）階段を上り、部屋に入ると何故か母さんが居た。

「あらお帰り、早かったのね。」

「何で居るんだよ母さん！ もう出てってよー」

「はいはい。あ、アリサちゃん、すずかちゃん。また今度お話聞かせてね。」

「は、はい。」

「また今度遊びに来たときに続きをお話しますね」

トイレに行っている少しの間に何でこんなに仲良くなってるんだ？
とりあえず、恥ずかしいから母さんの背中を押して部屋の外に押し出すことにする。

「うふふ、楽しみだわ」「もう出てってー！」「もう悠ッたら、じゃあ二人ともごゆっくり」

ばたん！

ドアをしめて一息つく。

「二人とも、母さんと何話してたの？」

「え？ 何でもないわよ？」

「そうそう、世間話……かな」

「ほんとかなあ」

うそ臭い。

「残りの時間はゲームでもして遊ぼうか。」

「そうね。」

その後たっぷり遊んだ後、二人は帰っていった。

アリサへの封印も気付かれずにすんなり終わり、心配事はこれで全部無くなっただろう。

帰り際、さすがが自分も皆に隠し事があると言っていた。

いつか皆に話すらしいが、きつとすずかにとって大きいことなんだろう。

ゆっくり話す準備をしてからでいいからと言っておいた。

それに納得したように頷いてから帰っていった。

「今日は賑やかだったわね。」

「そうだね。楽しかったよ。」

「またうちに呼びなさい。今度はなのはちゃんとレイトくんって子も呼んで」

「うん。紹介するよ。」

「ふふっ」

頭をぐりぐり撫でてから母さんは台所に消えていった。もうそろそろ夕食かな。

「母さん、今日は何食べるの？」

「なあに？ 今日はい——」

アリサが来るお話 後半（後書き）

アリサになんとなくリンカーコア付加してみました。
こういうSSって見たこと無かったので。

ちなみに別にアリサが狙われるとか今のところ全然考えてないのであしからず。

怒ってしまいそうなお話（前書き）

今日は短めかな。

ミスタイプや変換があつたら感想で教えてください。

怒ってしまいそうなお話

翌日から、何時も通り過ごした。

なのはや、レイトくんにもしかしたらアリサの件がばれるかもしれないとアリサの魔力を封印してから気付いたが、特に問題はなかった。なんでだろう？

そんなこんなでなのはとレイトくんは何時も通りジュエルシード探しに行き、俺たちはぶられ組は仲良く下校していた。

だがそんな学校生活を続けていくと、なのはやレイトくんも含めた全員で遊べないことにアリサの怒りゲージが溜まってくる。

俺とずすが必死にゲージを下げようと努力していくが、玉になのはが無自覚に上げていくので無理だと思う。

「ねえなのは、今日放課後みんなで翠屋行ってお茶でもしない？」

「……ごめんアリサちゃん。今日も……忙しいの。」

「ふう……………分かったわ」

「ごめんなさい……………アリサちゃん」

「……………」

怒鳴って行くのかなと思ったけど、意外と理性的だった。さすがはアリサ、かわいいぜ。

「はいはい、惚気てないでそろそろアリサちゃんも爆発しちゃうか

ら何とかしないとね。

なのはちゃんも一日くらい時間取れないのかしら?」

「べ…別に惚気てなんて居ない…よ、そもそもまだ惚気るほどの関係でもない…はず。」

「まだ…ね。本当に奥手ね悠くん。……それよりもアリサちゃん達を何とかしなきゃ。」

引つかかるよー。この子のこの「大人」って感じ何とかしてくれ。

「……んー。ちょっと無理言つて頼めば一日くらいもらえるんじゃない?

すずかさんとアリサのお稽古の休みの日にでも合わせて聞いてみれば?」

「悠くんは?」

「僕も一応習い事してるんだよ。でもまだ日にちは決まってないからもし被つたらごめんだね。」

「そっかあ、初めてみんなで遊べるかと思つただけだな。」

「まだダメとは決まつたわけじゃないし、それに今回はアリサ優先でしょ?」

「……そうね。分かったわ。とりあえず、なのはちゃんに聞いてくるわ」

「うん。言つてらっしゃい。」

「さてつと」

アリサの方を見ると自分の机に座って前を向いて若干落ち込んでい
るように見える。

よくない状態なのでアリサに近づき話し掛ける。

「アリサ、元気ないね。」

「悠……………」

アリサは俺の顔をその覇気の無い表情で見続けていたが、だんだん
表情が変わってくる。

「あれ？　なんか怒ってない？」

そう、僕の顔を見ながらだんだんと怒りの表情に代わっている。

多分だが安心できる僕の顔を見て、なのはへの怒りが沸いて来たの
だろう……………決して僕にいらついたのではないはずだ。

「あ…アリ「もう、なんなのよー！！　すつごくむかつくわー
！」　あががが、やめてやめてアリサやめて」

アリサに襟首を掴まれガクガク揺さぶれる。すつごく気持ち悪い。

「あーんもう！」

襟首を離して机に握り締めた両方の手を打ち付ける。

その様子を教室中が見ている。もちろんのはとレイトくんも。

「アリサちゃん。今度この日空いてるかな？　一緒に遊ばない？」

もちろんなのはちゃんとレイトくんもよ。」

さすがマイペースに話し始めたので、教室の空気も元に戻る。

「ほんとに！？ 絶対行くわ。」

すずかに携帯電話から見せられていた日付を見て了承するアリサ。
すぐになのはたちの所に言ってなにやらうれしそうに話を始めた。

「これでアリサちゃんは大丈夫かな。」

……あ、そうそう悠くん。この日何だけど都合が悪くなったら言うてね。

一応当日は車で送るつもりだから」

車ってあの高級車だろ？……………友達のうちに遊びに行くのに送迎付とは。

「分かったよ。事前に教えるよ。」

「うん。宜しくね」

結局水泳教室が重なってしまったため行けず、
俺を除いた4人はすずかの家の猫ルームで猫を堪能してきたようだ。
ちよつとうらやましい。

ただ心配なことに、その中の一匹がどういわけかその日謎の怪我

をしてきたらしい。

すずかがずいぶんと心配しているので、さっさと原因が判明してくれるとうれしい。

なあお二人さん。

あ、俺に原因は教えなくていいよ。知りたくないからさ。

怒ってしまいそうなお話（後書き）

えー、感想に返信するの忘れてました。

一応解説すると、

まずレイトくんですが、少々過信しやすい性格なので自分の知っていることが正だと考えています。つまりはここはアニメで放映されていたリリカルなのはの世界そのものなのだと思っているわけです。実際にはそれに近いだけの世界なので、多少本質的な違いがあるわけですが、それには気付かないためクラスメイトに事前に魔力があるかなんて調べてません。

次になのはですが、なのはは教室中の人間に一応魔力の探知を行っています。結果としてレイト、悠、アリサ、モブ1名に魔力があることは発見しているものの、こちら側への勧誘は行わないつもりです。あくまで興味から調べただけなので。

よって2度目は調べないつもりなので、魔力が減っても気付きません。

次にデバイスたちですが、レイトくんのデバイスは普段は完全に眠らされてるので気付いていません。

レイジングハートは、変化に気付いていますが主が気にしていないようなので進言していません。つまり気付いていると思っています。

そんな感じです。

温泉に行く準備段階の話（前書き）

なんか時間掛かった。

温泉に行く準備段階の話

あれから何日か経過し、温泉へ行こうとなりました。

まあ知ってたけどね。そういうことになるのは。

なのはの親からうちの母さんに電話があったそう。

内容は、温泉旅行にお宅の息子さんも連れてって良いか+そちらのご夫婦もどうか？

俺が行く事については即了承。父さんと母さんは父さんが仕事で行けない為、母さんも残るそう。

まあ仕方ない。楽しんでくるよとだけ言っておいた。

そういえば確かになのはに電話番号聞かれてたなあと思い出した。

温泉当日。

温泉自体は楽しみだから良いけど高町家の面々とは会いたくないなあと思う。

でも会いたくないといってももう遅いんだよなあ。もう会うことは決定しているんだから。

「はあ」

落ち込みながら高町家までの道のりをのんびり歩いているとホークが話し掛けてくる。

『マスター、昨日言っていた戦闘民族がどうこつて話ですか？』

「そうなんだよ。もう怖くてたまらない」

泣いちゃいそうだとか言いながらホークと雑談する。

俺の知識にあるリリカルなのはは、何故か彼らが理不尽に攻撃してくるイメージがあるし。

『あんまりおどおどしては彼らに感づかれますよ。もっと堂々として下さい。』

「そうは言ってもなあ。」

『それに理由も無く突然襲ってくるような方々ではないのでしょうか？』

「…うん…まあね。………たぶん」

『（たぶん？）なら大丈夫ですよ。あの高町嬢のご両親ならきっと優しい方たちでしょう。』

「……そうだな。ありがとうホーク。もう大丈夫だ。」

『そうですか。それは良かったです。マスター』

「おーい、悠！」

「あ、アリサだ」

声がした方を見ると、
アリサが見るからに高級な車に乗って手を振っていた。

「今からなのはの家に行くの？　なら乗っていきなさい。」

「あ、ありがとうアリサ」

「こちらへどうぞ。赤井様」

「うわ！、はっはい」

背後に居たことに気付かなかった。

アリサの執事である鮫島さん後ろのドアを開けてもらい中に入る。

「おはよう悠」

「おはようアリサ」

うん。挨拶は大事だ。

「あんた、お母様に車で送ってもらわなかったの？」

「ああそんなに離れてるわけでもないし、時間もあつたからゆっくり行こうかなって。」

「ふうん。なんか変なのね」

「変って……」

確かにゆっくり行こうって考える事自体、このくらいの子供には理

解しづらいのかもなあ。

さて、話題でも変えてみよう。

「ならアリサは普通にやってるのさ」

「私？ 私はねー。うちのワンコたちと一緒に遊んでるわ。」

「ワンコ？ そういえばアリサの家ってたくさん犬が居るんだっけ」

そういえば以前、そんなこと言ってたな。

「うん。いーっぱいいるわ！ちっちゃくてかわいいのも大きくてふかふかしてるのもたっくさん！！」

「へえー。俺も行きたいなー。今度遊びに行つていい？」

「もちろんいいわ、今度呼んで上げるわ。もう可愛くて仕方ないんだから！」

「うん。楽しみにしてるよ」

楽しく会話していると時間が経つのは早い。

いつの間にか高町家の前に着いていた。

「お嬢様、到着いたしました。」

「分かったわ。ありがと鮫島、さ、行こう悠」

「うん。鮫島さんありがとう」

俺がお礼を言っていると笑顔で一礼してくれた。

高町家前では既に旅行の準備を始めていたようで、荷物の積み込みを行っていた。

男の人が一人と女の人が……あの人は眼鏡だから美由希さんかな？男の人はどっちか分からない。これは恭也さんが老けてるんじゃない？

安チエイジングという奴だろうか？武術にはそういったことにも繋がっていると聞いたことがあるけど。

「なのは！」

「あ、アリサちゃん！……悠くんもおはよう！」

「おはようなのは！」「おはようなのはさん」

笑顔で挨拶を交わす俺たち。

どうやらなのはは俺達が来るのを家の前で待っていたようだ。

「すずかさんとレイトくんはまだ？」

「うんそうなの。すずかちゃんもレイトくんもまだ来てないんだ。」

「そう、なら荷物積んだ後はお茶でもして待ちましょ。」

「うん！」

3人で持ってきた荷物を積む。と言っても俺の荷物は着替えとタオルが入ったリュックくらいだ。

ワゴン車の前でせつせと荷物を積んでいる男の人に声を掛けようとする。先に高町が声を掛けた。

「お父さん、私のお友達の悠くんだよ。」

「は、始めまして。赤井悠といいます。よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げる。事前情報で恐ろしいと知っているだけに声が震えそうになるが何とか堪える。

「あはは、僕は高町士郎。なのはのお父さんだよ。今日はよろしくね。」

「は、はい!」

『ま、マスター……………』

う!

「なあに緊張してるのよ! 今日はよろしく願いしますね」

「そんなに緊張しなくても大丈夫だよ悠くん。アリサちゃん。こちらこそよろしくね。」

「じゃあお父さん。私たちはすずかちゃん達が来るまで家の中で待ってるね。」

「分かった。それじゃあ悠くんアリサちゃんゆっくりしてっね。」

「はい！」

「はい」

……………緊張したあ！！ 心臓が張り裂けるかと思った。
（念話です）それにしても意外と普通だった。あった早々殴られる
と思ってた。

『そんなわけ無いでしょう。誠実そうな方でしたよ』

俺も分かったよ。なんかすごくやさしそうな人だったな。

『それに見て驚きましたがとても高町嬢の父親とは思えない若さでしたね。』

そうだな、初め見たとき父が兄が分からなかった。

『さぞかしもてるんでしょうねえ』

……………俗っぽくなったなホーク。

「到着なの。ここでお茶しよー！」

高町家居間に着く。

「ちょっと待ってて、すぐにお茶持ってくる」

付いて早々どこかへ行くのは、おそらく台所に行ったのかな。

「へえー。」

キヨロキヨロあたりを見回す。そういえば人んちに来たこと無かったな。

「何キヨロキヨロしてるのよ。どっしりと構えてなさい！」

ふん！ と腕を組んで貫禄を出すアリサ。だがかわいい！

「おまたせー！ なの」

お盆にオレンジジュースを入れたコップを三つ載せたなのはが現れた。

「はい、悠くん。はい、アリサちゃん」

オレンジジュースを貰って一息つく。

「ふう、……………ねえなのは、ユーノはどうしたの？」

「え！ あ！ ユーノくんのこと忘れてた。」

言うなりなのはは2階へ駆けていった。

「まさか忘れてたなんて。」

「アリサ」

「ん？」

「ユーノってあのうわさのフェレット?」

「そうよ。本当にフェレットか少し疑わしいけど」

そう、ユーノについては下校時になのはが自慢げに話してきていたので知ってはいた。

が、以前の月村家イベントを逃していたため、今回が実は初遭遇になる。

わくわくしながら待っていると、階段をドタドタ下りてくる足音が聞こえる。絶対なのはだ。

「おまたせー。はいユーノくん。」

両手に乗せていたユーノを僕に渡そうと手を突き出してくる。ええっと、とりあえず

「ぎゃ」

右手で驚掴みしてみた。

「わわわ、だめだよ悠くん。そんな風に掴むんじゃないって両手に乗せるような感じで」

こう！ となのはは両手でお腕を作る。なるほどそれに乗せろと言っただけだな。

とりあえず両手でお腕を作ってユーノを乗せてみた。

するとユーノは何とか起き上がり、両足で立って右手でおでこの汗を拭いた。

.....

「あ」

何かに気付いて焦ったかのように瞬時に4足になり小動物っぽくなるユーノ。

正直フェレットっぽさなんてものは分からないけど確かにそれっぽい。

「ええつと……今このフェレット……仕事帰りのおっさんみたい
に汗拭いてなかった？」

「ふええええ！」

「ええ、確かに拭いてたわね。汗」

「ふええええええええええ！！」

これはだめだろ常識的に考えて。
アリサと二人で、コイツほんとにフェレットか？ という目で見つ
めているとなのは言い訳してきた。

「あのあのっ、ユーノくんは、今芸をしてたの！！」

「は？」

芸とな！

「なるほど、芸じゃ仕方ないわね。」

何がだ。

「そうなの、こんなことも出来るんだよ！」

そう言つてユーノを見る……………いや睨んでる。あれは睨んでるぞなの
は！

唐突にぎこちなくなるユーノはなのはに助けを求めるような視線を送った後、
意を決したように逆立ちを始める。

「おー、すごいすごい。悠ほら、逆立ちしてるわよ。」

アリサはそれを見て笑顔でパチパチと拍手を送ってる。

「あ、うんほんとだねー。」

そんな風に過ごしていると残り二人が到着したようだ。

「おまたせー。なのはちゃん、アリサちゃん、悠くん！」

「いらっしやいな。すずかちゃん。レイトくん。」

「準備は出来てるみたいだぞ。さっさと行こう。」

「うん！」

こうして移動の準備は整い、温泉旅館に向けて一路出発する運びとなった。

（念話）まだ今日は終わらないのか、一日が長い気がする。

『マスター……。ファイトです!!』

温泉に行く準備段階の話（後書き）

温泉編は最低後2話はあるのでよろしくお願いします。

旅館に着くまでの車の中の話（前書き）

超短い！

でもこんなくらいだとさくつと書けていい感じ

旅館に着くまでの車の中の話

大きな目のワゴンにて旅館へ移動する。

俺たち子供組は後ろから2列目の座席に居る俺とレイトくんとレイトくんの肩に乗ったユーノ。

それから最後の列の座席に座るアリサとすずかとなのはだ。

俺たち男の子組は座席をぐるりと回転させて女の子組と向かい合って話をしている。

女の子組はキャピキャピはしゃいでいる。温泉がそんなに楽しみなのだろうか？

まあ楽しみなんだろうな。俺も楽しみだし。

「今日は楽しみね！」

「ホントだね。」

そういえば桃子さんにもあった。若すぎかわいすぎ。何だこの人やばいだろ。

この人は確か武術とかには無縁なんだよな。なのにこの若さ。ケーキとかに何か秘密でもあるんだろうか？

「旅館に行ったら初めに何する？」

「あたしはもちろん温泉ね。」

「わたしもなの！」

「俺もだな」

高町家にここまでアンチエイジングが広まっているという事は、もしかしてなのにはも……

と言うことはなのはは一定以上の年齢の容姿にならないとか？

はっ！ まさか伝説のエターナルロリータがここで完成！？ 恐るべし高町家！

「ねえ悠！ あんたはどうするの？」

「え？ ああ、えつとりあえず温泉かな？」

「一応話は聞いてたみたいね。上の空に見えたから……、ちゃんと話に参加しなさい！」

「は、はい！」

俺ってアリサに怒られすぎかなあ。呆れられてないかな。

「結局皆温泉か、まあそりゃそうだよな。温泉旅館だし。」

「そうね。でも温泉旅館だとしても他にも色々あるじゃない。」

「卓球………とかかな？」

「卓球は温泉から上がってからだよな。」

「卓球は面白そうなの。やろー！ みんなで！」

「うん。もちろん！」

本当にテンション高いわ。レイトくんも結構楽しみにしてるっぽい。こつこつのもいいな。
あ、そうだ。

「そうだ、おれトランプ持ってきたんだ。みんなでやろう!」

「お、いいな。何やる?」

「まずはばば抜きに決まってるわ!」

こうして旅館に着くまでトランプで遊んでました。

旅館に着くまでの車の中の話（後書き）

さてさて、今まで主人公視点のみで書いてきたけど、他のキャラ視点も書いていこうかなーと思ってます。

一応メインの話は主人公視点オンリーで行くつもりなので、外伝やおまけみたいにして書くつもりです。

温泉に入る話

旅館”山の宿”に着いた。

アリサとすずかは宿の入り口にある池の鯉を眺めながらうれしそうに笑い。

なのはとレイトくとユーノはなにやら気合を入れている。

あぶれたおれはというと、恭也さん達と一緒に荷物運びをしていた。

「別に手伝わなくてもいいのだが、……………君は周りをよく見ているんだな」

「ほんといい子ね、もうすずかったら」

「いついえ、多分僕がおかしいんだと思うんで……………ええつと、すずかさんは悪くありません。」

「うふふそうね、そうしておくわ。」

忍さんの怪しい笑みに激しく血の繋がりを感じた。

先に士郎さんと桃子さんで部屋を見繕ってもらってるので、どこの部屋にどう荷物を運ぶかを聞きながら運ぶ。荷物自体は着替えやらで別に大した量でもないのですぐに運び終わった。すると自分以外の子供組が現れる。

「あーもう、こんなところにいた！ もうどこいったのよ！ 探したじゃない」

と言っても車を降りたとたん走り出したのは君らでしょうよ。

「ええっと、荷物運びしてたんだ。」

「そうなの？ 言ってくれば手伝ったのに。」

さすがが残念そうに言う。

「ほらみんな、そろそろ温泉に行くわよ」

「「「「はい。「「「「」

忍さんの号令で全員で温泉に行くことになった。

「ほらユーノくん、一緒に温泉入る？」

ユーノもてもてだな。

すごく嫌がつてるように見える。

念話でなのはとレイトくん嫌だと言ってるんだろっなあ。

「レイトくんも一緒に入る？」

さすががレイトくんを誘っている。レイトくんも抵抗しているようだが女性にはやはり勝てないのだろう、しぶしぶ女湯に入っていた。

「悠、ほら行くわよ！」

もちろんおれも誘われてる…現在進行形で。って言うかこの子たち見られて平気なのかよ。

小学三年生ってのはまだ……いや、羞恥心とかあるだろ。おかしいなあ。

「レイトも入るって言うてるんだからいいじゃない」

とは言ってもねえ。他はどうでもいいけどアリサの裸見るのはまずい気がする。紳士的な意味で。なんとか断りましょうか。

「えと……俺、土郎さんたちに話があるからこっち（男湯）に入るよ」

「……嘘っぱいわね」

「うっ！」

「……まあいいわ。今度は一緒に入りましょ。」

裸の付き合いがどうこう言ってる。漢らしいっすアリサさん！

「背中流してあげるよ。悠くん」

「あ、はい。お願いします」

広くて清潔感がある大きなお風呂。お客さんはどうやら俺たちしかないようでほぼ貸切状態だ。既に恭也さんは体を洗い終えているのか湯船に浸かっている。首から上だけ出しているが透明なお湯からは引き締まった体が見えてすごいと思う。

とりあえず…と体を洗い始め、背中を擦ろうとするとところに土郎さんが来た。もちろんさっきのアリサではないが裸の付き合いだろうと了承した。

「うーん。なかなか鍛えてあるねえ。なんかスポーツでもやってるのかい？」

俺の背中を見て感心したように呟く土郎さん。うーん…別に鍛えてるわけじゃないし、やってることと言えば水泳くらいだ。まさか魔法の特訓で筋肉付くわけじゃないしね。

「水泳教室に週3回通ってます。」

「そうか、………もし良かったらうちのクラブに入ってサッカーやらないかい？」

「サッカー……ですか？」

「うん。僕が監督をやってるクラブだね。結構強いんだよ。どうだい？」

「ええつと……………」

サッカークラブか、正直突然言われても興味も沸かないけど…………一度見学してみようかな。

「父さん。悠くんを余り困らせるなよ」

「あはは、そうだね。それじゃあもしクラブに入りたいときは僕に言ってね」

「あ…はい。ええつと一度見学してみたいです！」

「おおそつかい！なら一度体験してみるといいよ。今度の休みに一度翠屋に来てくれ。」

「は、はい分かりました」

いつの間にか見学ではなく体験になっていたが、まあ別に良いかな。

「はいこれで良しつと。さ、後はお風呂で温まろつか。」

「はい！」

なんだか士郎さんと親子みたいになってるなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1690w/>

逃げる人

2011年9月25日13時26分発行